

障害のある人の表現活動と発達

特集

実践報告

仲間たちの表現活動を仕事にする
みぬま福祉会の取り組み

工房集からの発信

宮本 恵美

はじめに

「工房集」は福祉の現場にギャラリーがある施設。アトリエがあり、ショップがあり、作品展中はカフェにもなる。また一方で「工房集」は社会福祉法人みぬま福祉会の仲間¹⁾の表現活動を社会につなげるアートプロジェクト名でもあり、活動拠点である。「そこを利用する仲間だけの施設ではなく、新しい社会・歴史的価値観を創るためにいろんな人が集まっていこう、そんな外に開かれた場所にしていこう」という想いを込めて集（しゅう）と名付け、2002年に開所した。「表現活動を支えたり広めたりすることを通して仲間と一緒に社会をより良いものに変えていこうとするもの」という役割がある（写真1）。

今でこそ「アートに特化した福祉施設」と言われるようになってきている工房集だが、その活動は障害の重い人たちの労働を模索し続けたみぬま福祉会の取り組みの中で始まった。「表現活動」は仲間たちにとって大切な仕事なのである。決して美術が得意な人たちを集めたわけではなく、むしろその逆で、「こんなことできると思わなかった」人たちが、「何もできない」と言われてきた人たちが、今までにない作品を生み出し、本人も幸せになっているだけでなく、周りの人の意識や既存の価値観まで変えていく。仲間が作る作品にはそんな力がある。

みやもと めぐみ
社会福祉法人みぬま福祉会 工房集（埼玉県川口市）

現在ではみぬま福祉会が運営する事業所のうち11ヵ所にアトリエがあり、120名以上の仲間たちが何かしらの表現活動をしている。その表現方法は絵画、織り、スタンドグラス、木工、写真、書、詩、漫画、紙粘土、また「糸を使った作品」や「ビニールテープを使った作品」、「銅線を使った作品」、「ホットボンドを使った作品」など、ジャンルにあてはまらない独自の作品まで多種多様である。外部作品展への出展依頼が年間30回前後に及び、作品が社会に広がっている。国内に留まらず、海外のギャラリーと独占契約を結んでいる人も、ニューヨークやフランスで作品が高額で売れている人もいる。作品が企業やファッションブランドとのコラボレーションという形で広告や商品デザインに二次使用される人も多くなってきた。

1 みぬま福祉会とは

母体となる社会福祉法人みぬま福祉会は、障害が重いために行き場をなくした人を守るうと、1984年に「どんな障害があっても希望すれば誰でも入れる施設づくりをめざす」ことを理念にして発足した。障害の重い人や他の施設を断られた人など様々な困難を抱えた人を受け入れ、利用者に合わせた施設づくりを重ね、30年経った現在、通所施設や入所施設等22の事業所を有し、300名以上の障害のある人たちが利用する。埼玉県南地域でかなり大きな法人となっている。どんな局面でも「困難や例外的な状況にある人を切り捨てない」ことを大切にしてきた法人であり、「つ

ないだ手を離さない」姿勢は、人間のよりよく生きたいという当たり前の願いを実現しようということと共通して、個や集団を発達させる力になると考えている。「一人を大切にすることがみんなを大切にすることにつながる」と、障害のある人たち、職員、家族、関係する人々が力を合わせ、共感の輪を広げ、真摯に歩み続けている。

2 表現活動を仕事に

みぬま福祉会では、設立当初より一人ひとりが当たり前生きていくために、どんなに重い障害があっても「働くことは権利」と位置付けた。みぬま福祉会の考える労働の定義とは、「お金を稼ぐこと」「社会につながる事」に加え、「仲間の発達につながる（労働の持つ発達の意義（生きる喜びや人間として豊かな発達につながるものをめざすもの）を保障する）」というもの。このような理念のもと、みぬま福祉会に集まった仲間たちの障害の程度は想像以上に重く、労働を保障する取り組みは困難の連続だったが、一人ひとりであった労働を模索し続けた。当初は缶プレスやウエス（機械の油拭き用布）作りの仕事が主流であった。一人ひとりの課題に応じて取り組み、多くの障害の重い人たちが1対1の関わりによって、1日たった1枚の布を引き裂くことで精一杯の重症心身障害のある人が充実した表情を見せたり、それまでバタバタと動き回っていた多動の自閉症の人がしっかりと缶を潰していたり、誇らしく仕事をしていた。

しかし、1992年、入所してきた重度の知的障害と自閉症があるAさんには、従来のやり方が通用しなかった。「仕事しよう」の声を拒否、大声を上げる、暴れる、パニック、個室にこもる。仕事の誘いには何でもかんでも拒否。仕事場に入れようとする服を脱いで拒否される。それでも何とか仕事してもらおうといろいろと工夫した。手先は器用なので鋏を使って布を切る仕事はどうだろうかと試みると、仕事はしてくれるようになったものの、職員との関係は悪くなってい



写真1 工房集外観

くばかり…。もう仕事のことは考えずまずは仲良くなるうと決め、ただ隣に座ったり、一緒に散歩に行ったりした。そうすると花の名前をよく知っていること、歌を歌ってくれることなど、少しずつ好きなものがあることが分かってきた。ある時小さな紙にラクガキをしている姿を見て、「お祭りのポスターに絵を描いて」とお願いすると、拒否することなく、すんなりと描いてくれたことをきっかけに「これを仕事にするしかない」という小さな発想が生まれた。

仕事に仲間を合わせるのではなく、仲間に合わせて仕事を見つけよう。障害や能力に焦点を当ててできる仕事を探すやり方では、仲間を棒に当てはめてしまうことになる。従来ある仕事の中でできそうなことを見つけ教え込んでできるようにするのでも、頑張ることを強要するのでもなく、生きる力を育てるために必要なことは何か考え、本人の好きなこと・興味のあること・得意とすること・自分らしさ・一人ひとりの独自性（表現）が活きる仕事を見つけよう。「表現活動」という呼び方にこだわったのは、絵を描けるように教え込むことでも、才能のある人の発掘でもなく、芸術家を育てようとしたわけでもないからだ。一人ひとりの表現を形にし、社会に発信し、お金にしていこう（＝仕事）と位置付けたのである。

こうした表現活動はつぎのような特性を持つ。「こういったモノをつくる」という完成形がない。量や時間の縛りがない。一人ひとりに合わせた対応ができる。みんなに合わせてもらう必要がな